

第6節 整理作業の方法と経過

1. 整理の方法

遺構図面は測量用ソフトで平面図を記録したものを、土層断面図は基礎整理した後の原図をスキャナーでコンピュータに取り込み、それらを下図として図面編集ソフトによりデジタルトレースした。平面図と断面図の整合作業は、図面編集ソフト内で行った。

遺物の洗浄は、瓦にはハイ・ウォッシャーを用い下洗いをし、その後その他の遺物と同様に手作業で洗浄した。注記はジェットマーカーにより行った。その後に、接合・抽出作業を行い、その中から登録遺物を選別した。破損の可能性のある遺物は復元作業を行った後、実測をした。遺物の実測は調査員および作業員が手描きし、その原図をスキャナーでコンピュータに取り込み、それを下図として図面編集ソフトによりデジタルトレースした。

2. 整理作業経過

(1) 平成19年度

新堤地区

野外調査が終了後、1月7日から整理作業を本格的に開始した。遺構平面図・土層断面図の整理作業を行うとともに、現地調査期間中から開始していた遺物の洗浄・注記作業を行った。3月29日までに遺物・その他の資料を、仙台市文化財課高砂収蔵庫へ納入、現場事務所を撤収して、本年度の全ての作業を終了した。

蟹沢地区

野外調査が終了し、11月29日から整理作業を本格的に開始した。遺物の水洗洗浄・注記作業と並行して遺構平面図・土層断面図の基礎整理作業を行った。3月29日までに遺物・その他の資料を仙台市文化財課高砂収蔵庫へ納入、現場事務所を撤収して、本年度の全ての作業を終了した。

(2) 平成20年度

新堤地区・蟹沢地区

整理事務所を仙台市宮城野区鶴ヶ谷東に設置し、7月15日から整理作業を開始した。遺物・その他の資料を仙台市文化財課高砂収蔵庫から搬入後、遺物調書の作成を行い、並行して遺物の接合・抽出・登録・拓本と復元作業を行った。同時に、実測・デジタルトレースを行い、遺物の写真を撮影した。3月27日に、本年度の全ての作業を終了した。

(3) 平成21年度

新堤地区・蟹沢地区

平成20年度の整理作業に引き続き、6月1日から整理作業を再開した。遺物の接合・抽出・登録作業を行い、その後、拓本・復元作業を行った。遺物の実測は拓本・復元作業の終了後に行った。遺物の写真撮影は、断続的に継続した。並行して遺物のデジタルトレースを行った。また、サンプルとして採取した窯壁のバインダーによる強化処理を行った。デジタルトレースと並行して、遺構・遺物の版組・レイアウトおよび遺構・遺物の図版・観察表の作成を行い、これをもとに報告書を作成した。

第2章 新堤地区

第1節 基本層序と自然地形

基本層序（第9図）

調査区周辺は、東西に延びる丘陵を谷が南北に開析する地形であり、調査区は、丘陵頂部付近のやや平坦な面、谷部へと向かう丘陵斜面、谷部にあたる。

調査範囲が広範囲におよんでおり、それぞれの部分で若干の違いはあるが、新堤地区の基本層序は以下の通りである。

I層：黒褐色（10YR3/2）シルト層である。木の根・木の葉等を含んでおり、丘陵斜面全域で認められる。表土層である。

II層：灰黄褐色（10YR4/2）シルト層である。谷部へと向かう丘陵斜面の一部のみに分布する。

III層：にぶい黄褐色（10YR4/3）～明黄褐色（10YR6/6）の砂質シルト層である。径2～10mm程度の礫を含む地山である。本層の上面が、遺構検出面である。下層は、にぶい黄褐色（10YR4/3）～明黄褐色（10YR6/6）の粘土質シルトとなる。西側丘陵頂部付近、7～10号窯跡の周囲では、さらに下層の白色粘土質シルト・凝灰岩質砂岩が露出しているところがある。白色粘土質シルトの層厚は、5cm未満である。

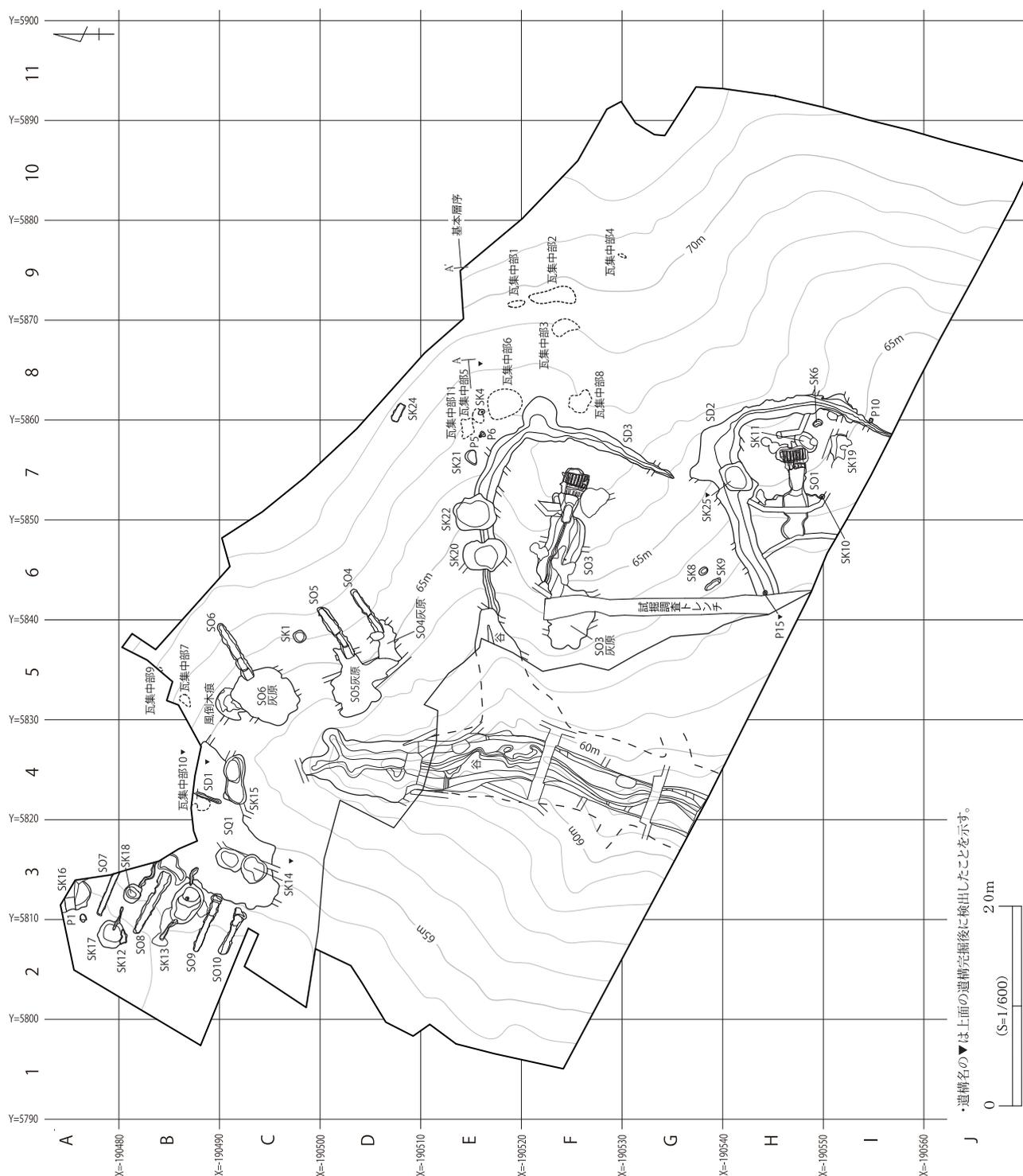
I・II層からは、軒丸瓦・丸瓦・軒平瓦・平瓦・棟平瓦・鬼瓦・隅切瓦、土師器・土師器須恵器・硯・石器・石製品・陶器・近世瓦が出土している。総破片数は22,198点で43点を図示した（第150～158図）。



第9図 基本層序(新堤地区遺構配置図A-A')

谷（第11・12図）

谷は、調査区のやや東寄りC・D-4、E-4～6、F-4・5、G-3・4グリッドに所在する。C-4グリッドに谷頭があり、南側は調査区外へ延びる。E・F-5、G-4グリッドから東側へ、F-3グリッドから西側に分岐する支谷が認められる。支谷の谷頭はE-5・6グリッドにあり、谷頭部には3号窯跡に付属する排水溝(3号溝)が連続している。谷の規模は、長さ40m以上、上端幅6mである。支谷の規模は、谷頭部分のみの調査のため明確ではないが、長さ13m、上端幅は5～6mである。谷の堆積土の厚さは、谷頭付近で1m、Aラインで70cm、Bラインで1.1m、Cラインで1m



第10図 新堤地区遺構配置図

である。断面形は「U」字形である。底面は滑らかであるが、部分的に凹凸がみられる。

堆積土は12層に分けられる。3層上面で灰白色火山灰を確認した。6・9・11層からは、比較的多くの遺物が出土している。谷は周囲の斜面からの流入堆積層によって、徐々に埋没している。

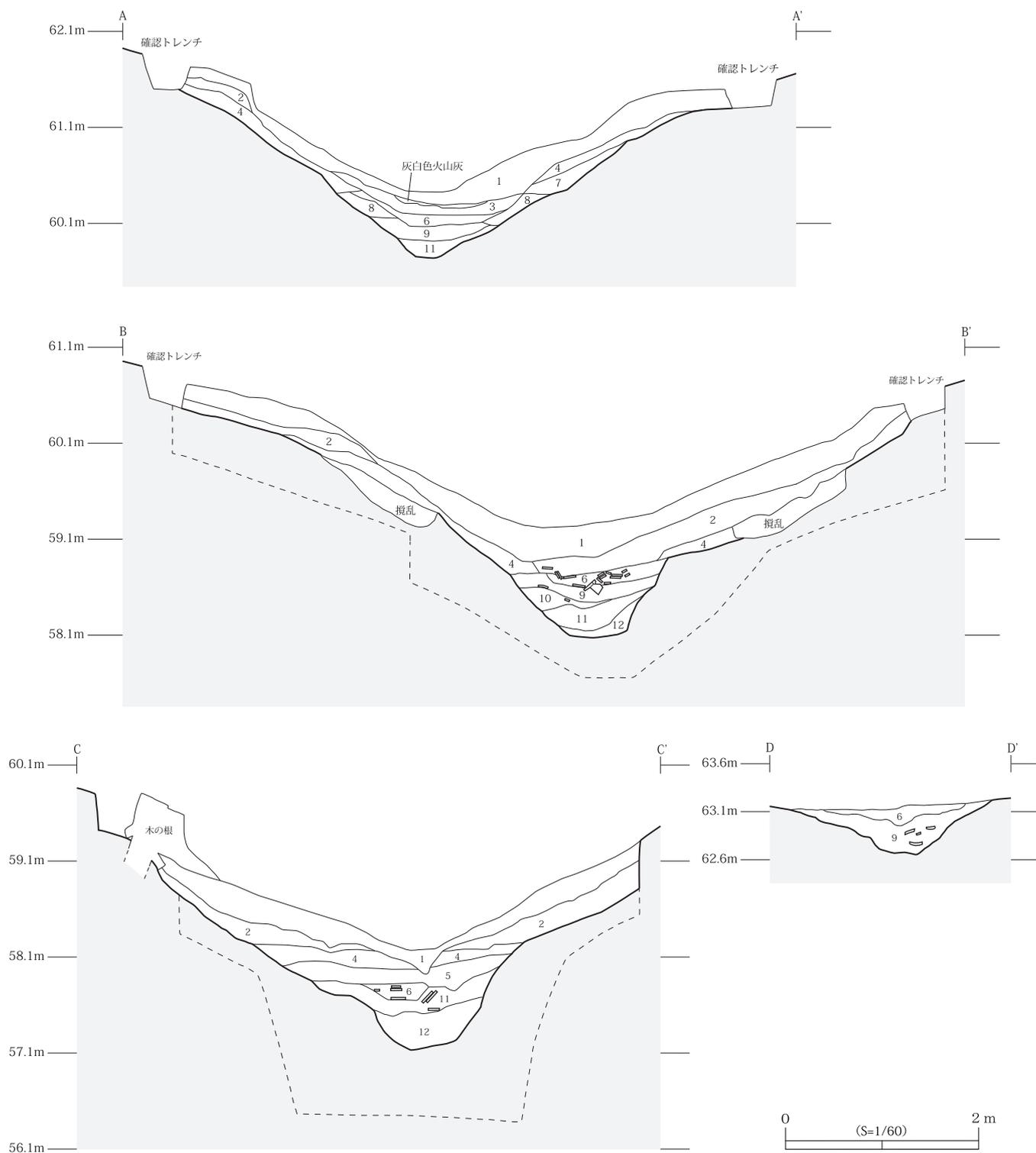
遺物は、軒丸瓦・丸瓦・軒平瓦・平瓦・棟平瓦・鬼瓦・土師器・須恵器が出土している。総破片数は1,668点で、10点を図示した(第151・152図)。

第2節 新堤地区の遺構と遺物

新堤地区で確認した遺構は、平窯2基・竈窯7基・灰原1ヶ所・溝1条・土坑20基・ピット5基の総数36基である。その他に、瓦集中部11ヶ所を確認した(第10図)。



第11図 谷平面図



層位	土色	土性	特徴	層位	土色	土性	特徴
1	灰黄褐10YR4/2	粘土質シルト	上半部は粘土質シルト(にぶい黄褐)と砂(にぶい黄橙)と互層をなす。下半部にシルト(灰黄褐10YR4/2)を帯状、粘土質シルト(明黄褐)小ブロックを多量、植物遺体を帯状に極多量含む。	7	暗褐10YR3/3	シルト	下部に粘土質シルト(明黄褐)を帯状に多量含む。
2	灰黄褐10YR4/2	シルト	下部に粘土質シルト(明黄褐)含む。	8	黒10YR2/1	粘土	粘土質シルト(灰黄褐)と互層をなす。炭化物粒・酸化鉄を微量含む。
3	褐灰10YR4/1	粘土	酸化鉄を多量含む。上部に火山灰小ブロックを少量含む。中央部に炭化物粒を微量含む。下部に粘土質シルト(にぶい黄橙色)を帯状に多量含む。	9	褐灰10YR4/1	粘土	酸化鉄を多量含む。炭化物粒を微量含む。
4	灰黄褐10YR4/2	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む。	10	灰黄褐10YR4/2	粘土質シルト	粘土(褐灰)と互層をなす。酸化鉄を少量含む。炭化物粒を微量含む。
5	黒褐10YR3/1	粘土	中～下部に粘土質シルト(明黄褐)大ブロックを多量含む。中部に粘土(褐灰)大ブロックを少量含む。酸化鉄を含む。	11	黒褐10YR3/1	粘土	酸化鉄を少量含む。炭化物粒を微量含む。
6	褐灰10YR4/1	粘土	酸化鉄を多量含む。炭化物粒を微量含む。	12	にぶい黄2.5Y6/4	砂質粘土	下部は砂(褐灰)を帯状に含む。炭化物粒を微量含む。

第12図 谷土層断面図

遺構はすべて表土直下のⅢ層上面で検出した。窯跡は、立地等から見て、下記の3群に分けて把握できる。調査区はやや東側を南北に延びる谷の谷頭上方の西側斜面に一群(7～10号窯跡)、谷頭上方の北側斜面に一群(4～6号窯跡)、谷を望む東側斜面に一群(1・3号窯跡)がそれぞれ位置する。2号窯跡は、調査当初検出したプラン内に多量の焼土が混入しており、西側と南側が削平された窖窯と判断して調査したところ土坑(19号土坑)であることが判明したため欠番とした。窯はⅢ層を掘り込み、床面・壁を構築した上で天井を架構したと考えられる。後世の削平のため、上部施設(煙出部・天井部)は残存していない。また、窯体側壁内外などから、炭化した構架材を確認した。灰原は、全ての窯跡で認められた。7～10号窯跡では、各窯体と1号灰原の位置関係から灰原を共用していたことが考えられる。

窯跡からは、丸瓦・重弧文軒平瓦、単波文軒平瓦、平瓦・棟平瓦・鬼瓦などが出土している。今回調査した窯跡からは須恵器も出土しているが、出土量が極めて少ないこと、出土した層位が堆積土の上層であること、歪み・ヒビ等の入ったものが認められないことなどから窯跡は瓦専用窯であったと考えられる。

溝跡は、3条を検出したが、2条は1・3号窯跡に伴う施設である。

土坑は、調査区の北側斜面で2基(1・15号土坑)、東側斜面で12基(4・6・8～11・19～22・24・25号土坑)、西側斜面で6基(12～14・16～18号土坑)を確認した。

ピットは組み合うものがなく、詳細は不明である。

瓦集中部は、Ⅲ層直上に瓦が集中していた部分で、その中心は3号窯跡上方の東側斜面である。

今回の発掘調査の結果、都市計画道路の設計が変更され、2基の平窯の上部に架橋することになり、検出した窯跡9基全てが現状保存となった。そのため、全ての窯跡の窯体は断ち割り調査をせず、床面上に施設として敷設された瓦は窯跡の一部として現状のまま保存することとした。路線にある1・3号窯跡では周囲の橋脚設置部分にトレンチを設定し、整地層の調査を実施した。

窯 跡

1号窯跡(SO1)(第13～52図・第5表)

【確認状況】 調査区の東側斜面、G-7、H・I-6～8グリッドに位置し、丘陵から南側に樹枝状に延びる台地付根部付近の、西側斜面に構築されている。攪乱により削平されている部分もあるが、窯体の残存状態は良好である。11号土坑・25号土坑と重複しており、本遺構が古い。本窯跡の北側に隣接する3号窯跡の窯体との間隔は、19.65mである。本窯跡は岩盤まで掘り込み、床面・壁面を構築している。天井部は、窯体内の堆積層の状況から、スサ入り粘土によって架構したと考えられる。窯体の周囲には、Ⅲ層を主体とする明黄褐色・にぶい黄褐色・淡赤橙色を示す整地層(A～G)が認められる。整地層の周囲には、Ⅲ層が黒色(暗色)化した部分が認められる(註)。また、窯体及び窯体周囲の被熱状況は、平面的な観察のみにとどまる。

(註) 東北学院大学教養学部地域構想学科教授であり、地形学がご専門の松本秀明氏に現地をご覧いただき、「この部分は下層の漸移層的で、混入物も(混入度合いに多少の違いはあるものの)同じであること。自然堆積層の混入物は倒れていることが多く、本例も同様であることから、連続した堆積物の上部が土壌化し、黒色(暗色)化したもので、Ⅲ層の一部と考えられる」とのご教示を得た。

【窯体構造】 半地下式有牀(ロストル)式の平窯である。

【規模】 焼成部～前庭部までの窯体の全長は、9.25mである。

【中軸線の方向】 焼成部～前庭部を通す中軸線の方位はN-88°-Eである。

【操業面数】 2面(A期:構築時床面、B期:細別17層上面)

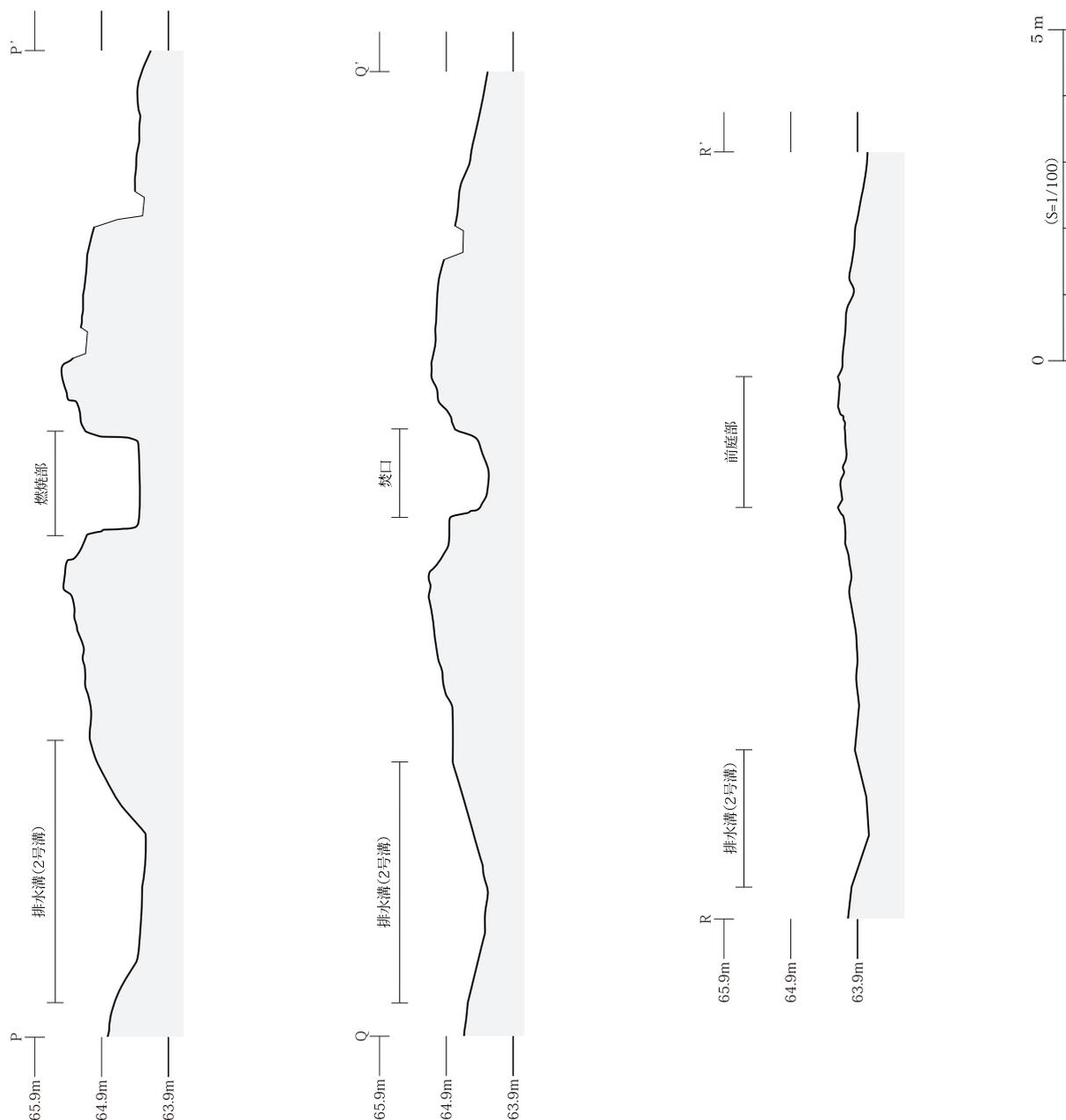
【煙出部】 残存しない。



第15図 1号案跡土層断面図



第16图 1号窯迹断面图(1)

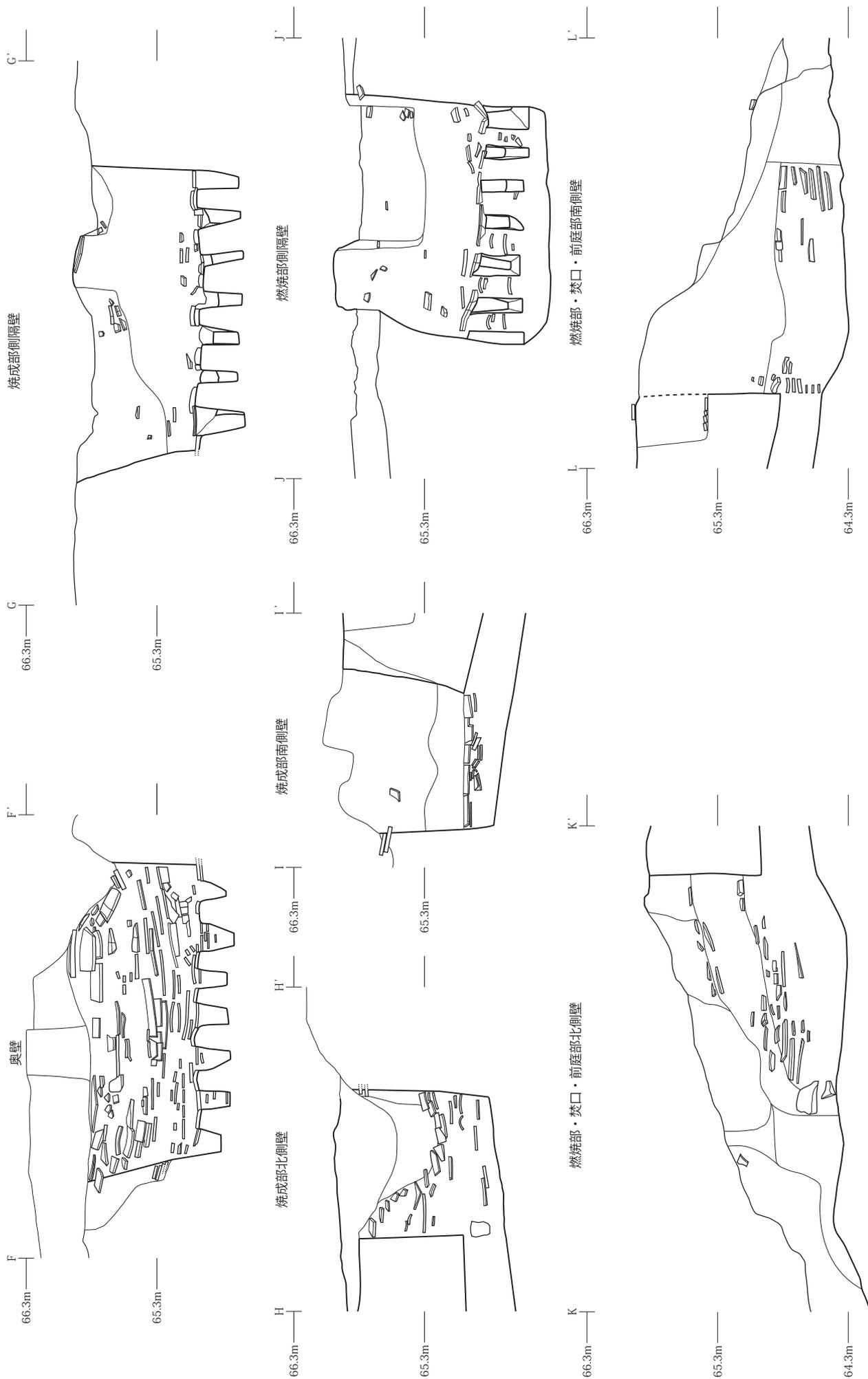


第17図 1号窯跡断面図(2)

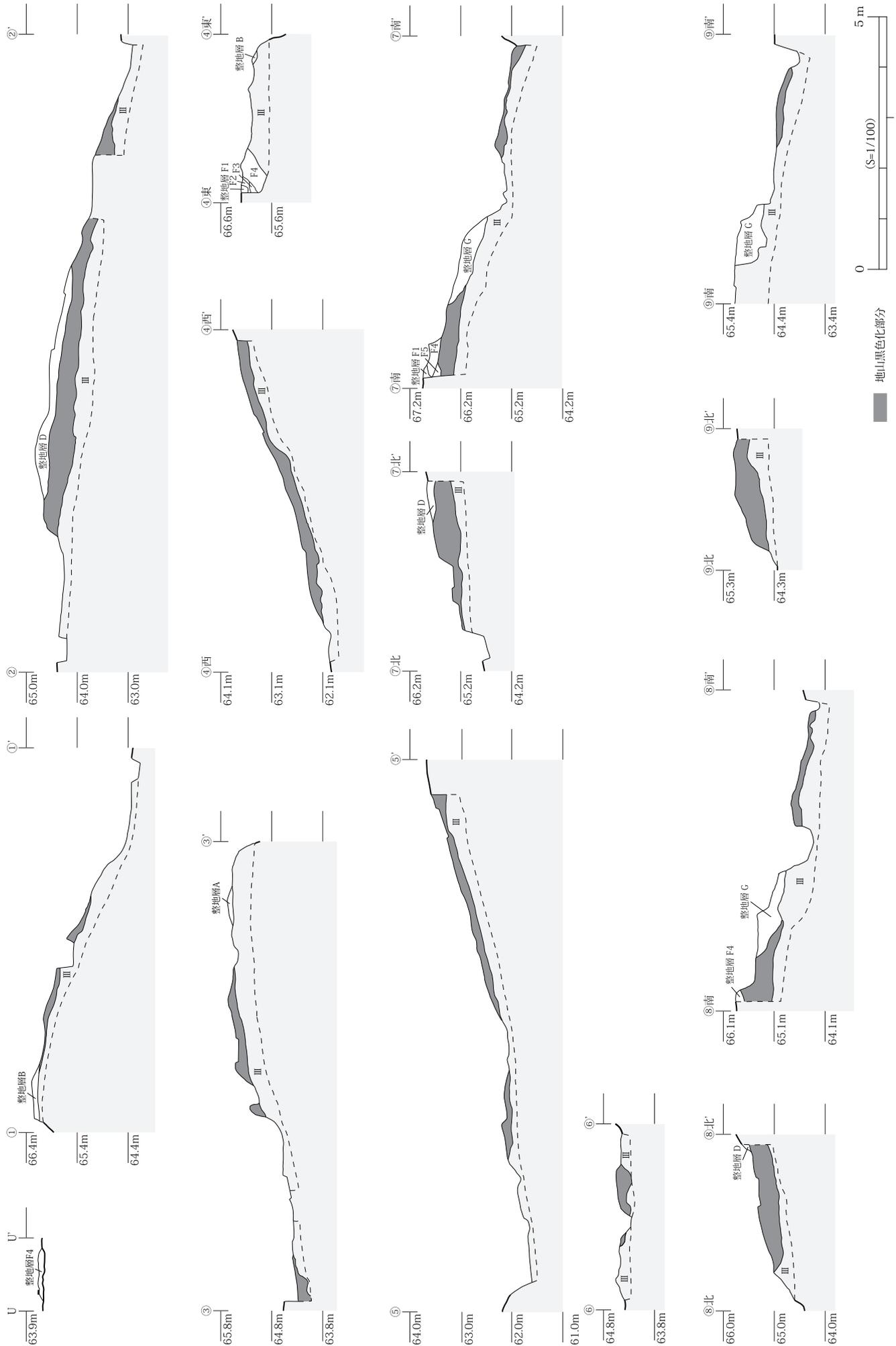
【 焼 成 部 】 規模は下端で計測して、奥行き 1.0～1.1m、幅 2.1～2.2m、検出面から床面までの壁高は 1.35m である。平面形は、上端では隅丸長方形で、下端は奥壁部が内側に湾曲して張り出す長方形である。床面に凹凸は認められず、奥壁から隔壁に向かって 8°の角度で傾斜する。

四方の壁は、縦長に半截した平瓦の凸面を上置き、長辺を壁面と合わせ、スサ入り粘土と交互に積み重ねている（写真 4-11・12、5-3）。隔壁及び北側壁の表面には、スサを入れていない粘土を貼っていた痕跡が認められるが、隔壁を除き、四壁のほとんどの部分で剥落し、壁を構築した瓦積みが露出している。四壁の瓦積みは、北側壁及び奥壁で 20 段以上、隔壁で 10 段以上を確認した。南北両側壁は、床面からほぼ垂直に立ち上がっている。南側壁には、瓦積みが崩落した部分が認められる。この部分の補修は、スサを入れていない粘土を貼った痕跡が認められ、再度の瓦積みは行っていない。瓦積みは、奥壁が積み上げられた後に、北側壁が積み重ねられていた。南側壁は瓦積みが崩落しており、明確ではないが、部分的に残存している部分から、同様であったと考えられる。

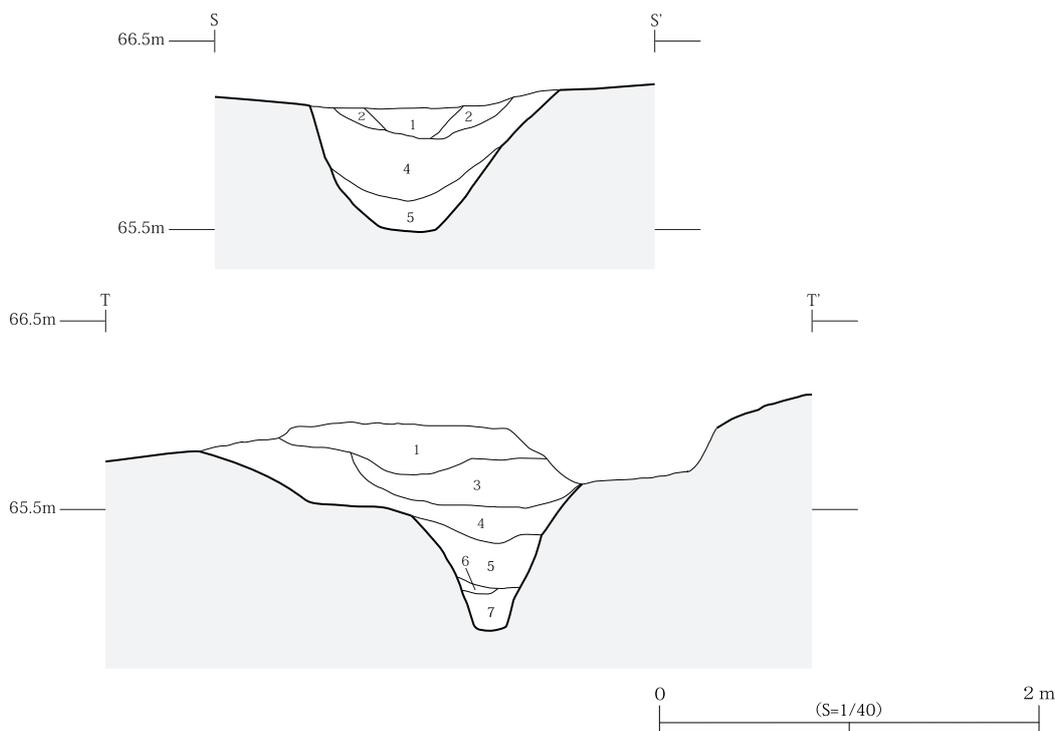
分焰牀と奥壁の関係は、分焰牀が奥壁構築後に構築されている。分焰牀は隔壁西側端部から奥壁方向に向かって、縦長に半截した平瓦の凸面を上置き、スサ入り粘土と交互に積み重ねて構築している。分焰牀は幅 20cm 前後、高さ 45～50cm（瓦 10 段以上）、隔壁の下部を含めた長さは 1.8～1.9m である。側壁と各分焰牀の間には、



第18図 1号窯跡側面図



第20図 1号築跡整地層・III層黒色化部分確認トレンチ土層断面図



第21図 1号窯跡排水溝(2号溝)土層断面図

1号窯跡

層位	土色	土性	特徴	層位	土色	土性	特徴
1	褐7.5YR4/4	粘土質シルト	流入堆積層(大別1層) 焼土粒・礫を含む。炭化物粒を微量含む。下部に焼土を帯状に含む。	10	褐10YR4/4	粘土質シルト	窯体崩落層(大別5層) 礫を含む。上部に粘土(にふい黄)中ブロックを少量含む。焼土を微量含む。炭化物粒を極微量含む。
2	明赤褐5YR5/8	粘土質シルト	流入堆積層(大別1層) 焼土大ブロックを極多量含む。礫を含む。	11	褐10YR4/4	粘土質シルト	窯体崩落層(大別5層) 礫を含む。
3	にふい黄橙10YR7/3	砂質シルト	流入堆積層(大別2層) 灰白色火山灰一部に粘土質シルト(明赤褐)を少量含む。	12a	にふい赤褐5YR4/4	粘土質シルト	窯体崩落層(大別5層) 火山灰(にふい黄褐)大ブロックを含む。
4	明赤褐5YR5/8	粘土質シルト	窯体崩落層(大別3層) 焼土を極多量含む。下部に粘土質シルト(にふい黄橙)中ブロックを多量含む。	12b	にふい黄褐10YR5/4	粘土質シルト	窯体崩落層(大別5層) 焼土・礫を少量含む。炭化物粒を極微量含む。上部に粘土(にふい黄)を帯状に含む。
5	にふい黄褐10YR5/4	粘土質シルト	流入堆積層(大別4層) 上部・下部に焼土極大ブロックを多量含む。粘土(にふい黄)大ブロック・礫を多量含む。	13	にふい赤褐5YR4/4	粘土質シルト	窯体崩落層(大別5層) 粘土質シルト(にふい黄褐)極大ブロックを多量含む。焼土中ブロックを含む。礫を少量含む。炭化物粒を極微量含む。
6	褐10YR4/4	粘土質シルト	流入堆積層(大別4層) 焼土大ブロックを多量に含む。粘土質シルト(明黄褐)中ブロック・礫を少量含む。炭化物粒を極微量含む。	14	赤褐5YR4/8	粘土質シルト	窯体崩落層(大別5層) 中に砂質シルト(明褐)、下層に砂質シルト(暗赤褐2.5YR3/4)、最下層に砂質シルト(暗赤褐2.5YR3/3)をブロック、帯状に含む。礫を微量含む。
7	にふい黄褐10YR4/3	シルト	流入堆積層(大別4層) 上部に灰白色火山灰(明黄褐)を帯状、ブロック状に多量含む。下部に粘土質シルト(にふい黄褐10YR5/4)を帯状に含む。焼土を帯状に含む。礫を少量含む。炭化物粒を微量含む。	15	明赤褐5YR5/6	粘土質シルト	窯体崩落層(大別5層) 粘土質シルト(にふい黄褐)大ブロックを多量含む。焼土極大ブロックを多量含む。礫を少量含む。
8	暗褐10YR3/4	シルト	流入堆積層(大別4層) 炭化物を極多量含む。焼土粒を微量含む。	16	オリープ褐2.5Y4/6	粘土質シルト	燃料残滓層(大別6層) 炭化物粒を含む。焼土粒を微量含む。上部に粘土質シルト(明黄褐)を帯状に含む。
9	にふい黄褐10YR6/4	粘土質シルト	流入堆積層(大別4層) 東半部にシルト(にふい黄褐)を帯状に含む。礫を含む。	17	黒褐10YR3/2	粘土質シルト	燃料残滓層(大別7層) 砂質シルト(褐)を多量含む。粘土質シルト(オリープ黒)中ブロックを含む。焼土粒・炭化物粒を微量含む。

1号窯跡排水溝(2号溝)

層位	土色	土性	特徴	層位	土色	土性	特徴
1	にふい黄褐10YR4/3	砂質シルト	流入堆積層 東側に砂質シルト(にふい黄)を帯状に含む。東側下部に植物遺体を帯状に含む。焼土ブロックを極微量含む。	5	にふい黄褐10YR5/4	砂質シルト	流入堆積層 砂質シルト(褐)を含む。礫を微量含む。
2	黒褐10YR3/2	シルト	流入堆積層 下部に粘土質シルト(明黄褐)小ブロックを含む。礫を少量含む。	6	褐10YR4/4	砂質シルト	流入堆積層 焼土層。礫を微量含む。
3	灰黄褐10YR4/2	砂質シルト	流入堆積層 粘土質シルト(明黄褐)小ブロックを多量含む。礫を微量含む。	7	明赤褐5YR5/8	砂質シルト	流入堆積層 砂質シルト(褐)を層状に極多量含む。
4	黄褐10YR5/6	砂質シルト	流入堆積層 礫を少量含む。				

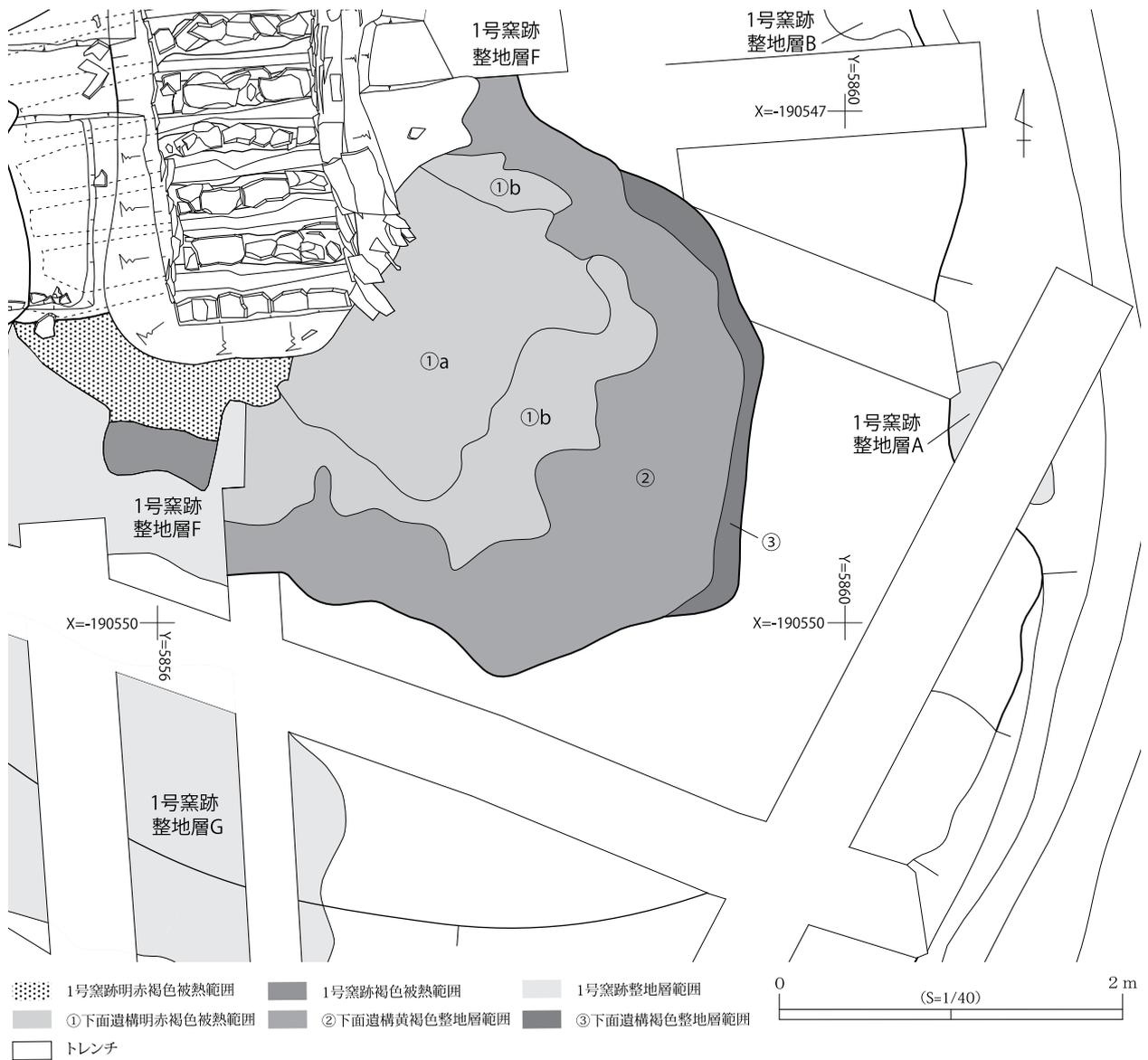
1号窯跡整地層・III層黒色化部分

層位	土色	土性	特徴	層位	土色	土性	特徴
整地層A	明黄褐10YR6/6	砂質シルト	礫を多量含む。	整地層F2	黄褐10YR5/6	砂質シルト	焼土・礫を含む。
整地層B	明黄褐10YR6/6	砂質シルト	礫を多量含む。	整地層F3	明赤褐5YR5/6	粘土質シルト	礫を含む。
整地層D	明黄褐10YR6/6	砂質シルト	礫を含む。焼土粒・炭化物粒を微量含む。	整地層F4	明黄褐10YR6/6	砂質シルト	礫を含む。焼土粒・炭化物粒を微量含む。
整地層E	にふい黄褐10YR4/3	砂質シルト	粘土質シルト(にふい黄橙)大・極大ブロックを多量含む。炭化物粒を微量含む。	整地層F5	にふい黄褐10YR4/3	粘土質シルト	礫を少量含む。
整地層F1	明赤褐5YR5/6	砂質シルト	粘土質シルト(にふい黄褐)中ブロックを多量含む。礫を少量含む。	整地層C	にふい黄褐10YR5/4	砂質シルト	礫を少量含む。上部に焼土粒・炭化物粒を微量含む。

幅 10 ~ 20cm の 7 本の 焰道 が あり、 隔壁 下部 の 通 焰 孔 と つ な が っ て い る。

床面・壁面は、被熱により極めて強く赤色化し、硬化している。窯体周囲の被熱状況は、窯体に近い部分では明赤褐色であり、離れた部分では褐色である。

構架材は確認されなかった。

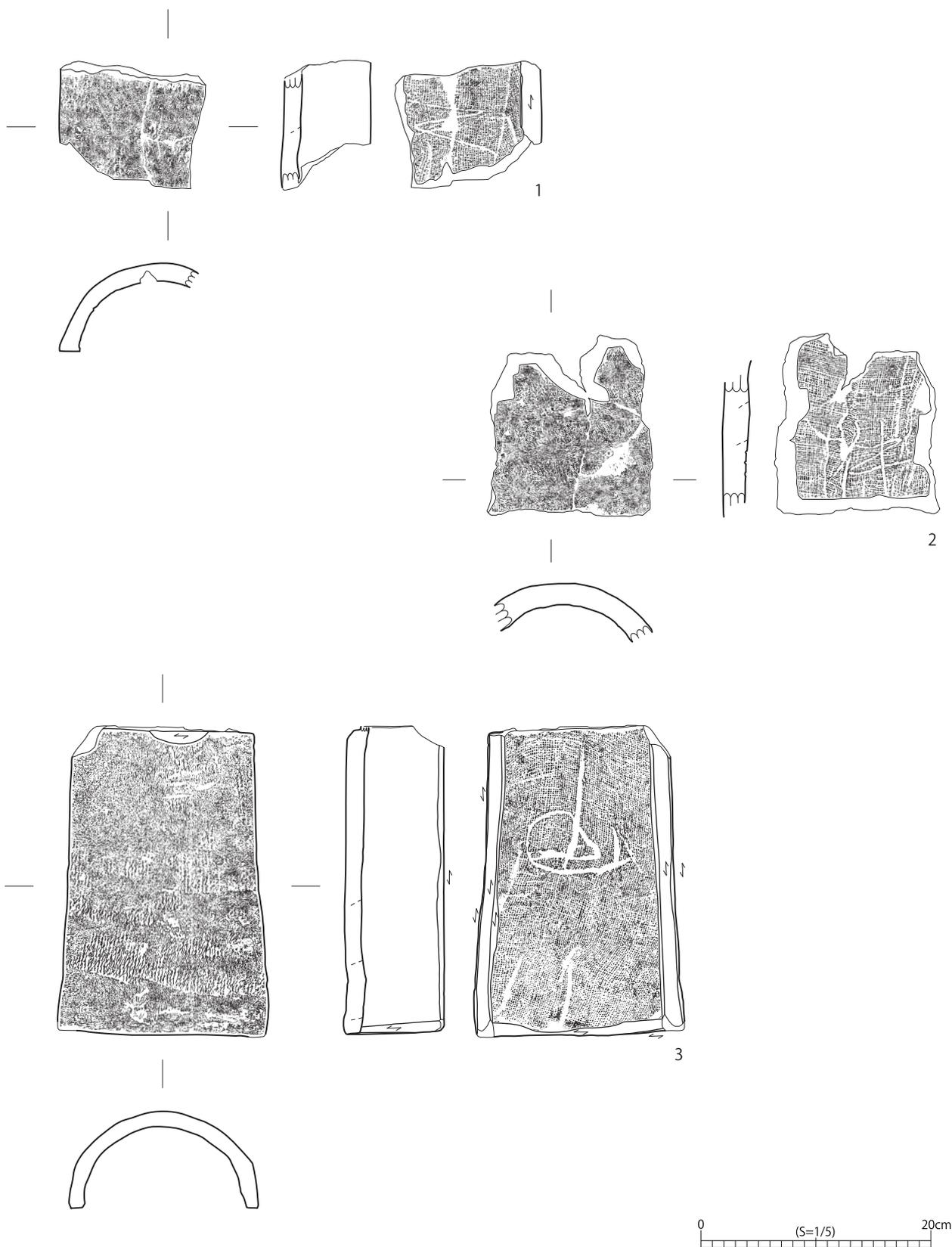


第22図 1号窯跡整地層F下面確認遺構平面図

【 隔壁部 】 隔壁は厚さ 90～95cm、燃烧部の床面からの高さは 1.65m である。通焰孔は、隔壁下部の 7 本の焰道の上部を完形の平瓦を凹面を上にして覆い、立面形が長方形もしくは下部が窄まる台形で、幅 10～20 cm、高さ 30～45cm である。烧成部に構築されている 6 本の分焰牀（ロストル）は隔壁下の分焰牀と連続しており、烧成部の焰道は隔壁下の通焰孔にそのまま繋がっている（写真 5-4～11）。隔壁下の通焰孔の床面は、燃烧部に向かって 17°の角度で傾斜する。隔壁西側端部の床面と、燃烧部の床面には 40cmの段差が認められる。隔壁は、分焰牀が構築された上に平瓦を積み上げて構築されている。焰道の上部を覆う完形の平瓦は、調査時の観察では 2～3 段にわたっており、平瓦とスサ入り粘土を交互に積み上げている（写真 5-4）。また、この時に積み上げる平瓦の表裏面の使用に、規則性は認められない。その上部に、平瓦を積み上げた痕跡は認められない。隔壁の燃烧部側表面には、垂直方向に並んだ板状の圧痕が認められる（写真 5-4）。板状の圧痕の側面に前後の歪みは認められるが、相互の圧痕に重複は認められない。また、この部分は粘土が一体化しておらず、ほぼ水平方向に不連続面が観察できる（写真 5-4）。

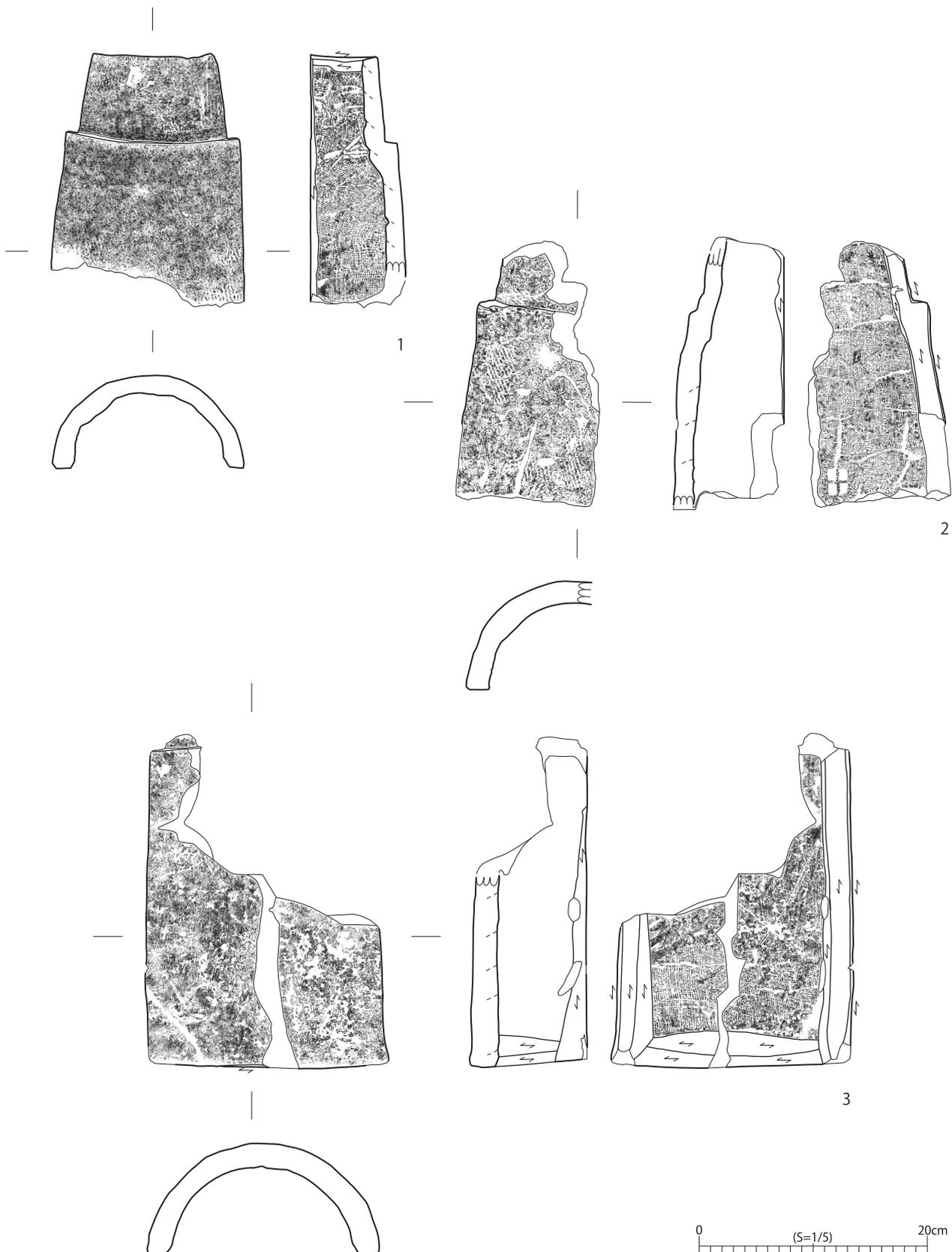
床面・壁面は、被熱により極めて強く赤色化し、硬化している。窯体周囲の被熱状況は、窯体に近い部分では明赤褐色で、離れた部分では褐色である。

構築材は確認されなかった。



番号	遺構名 グリッド	層位	種別	最大長 (cm)	広端幅 (cm)	狭端幅 (cm)	厚さ (cm)	瓦当面 長(cm)	瓦当面 厚さ(cm)	色調	成形・調整 備考	登録 番号	写真 図版
1	1号窯跡	整地層	丸瓦	11.2+ 玉-	11.5+ 玉-	-	1.6 玉-	-	-	凹面：2.5Y 5/2 凸面：10YR 7/3	凹面：粘土組織→布目痕 凸面：縄叩き→ロクロナデ 周縁：側面ヘラケズリ 凹面：ヘラ書き「Z」	F-001	1-1 102
2	1号窯跡 灰原	9	丸瓦	15.9 玉-	14.1+ 玉-	-	2.3 玉-	-	-	凹面：7.5YR 7/3 凸面：7.5YR 6/4	凹面：粘土組織→布目痕 凸面：縄叩き→ロクロナデ 凹面：ヘラ書き「体」	F-002	1-2 101
3	1号窯跡 灰原	9	丸瓦	27.4+ 玉-	17.8 玉-	13.1 (15.9) 玉-	1.6 玉-	-	-	凹面：2.5Y 5/1 凸面：5Y 5/1	凹面：布目痕 凸面：縄叩き→ロクロナデ 周縁：側面・広端面ヘラケズリ 凹面：ヘラ書き「伊」	F-003	1-3 103

第23図 1号窯跡出土遺物(1)



番号	遺構名 グリッド	層位	種別	最大長 (cm)	広端幅 (cm)	狭端幅 (cm)	厚さ (cm)	瓦当面 長(cm)	瓦当面 厚さ(cm)	色調	成形・調整 備考	登録 番号	写真 図版
1	1号窯跡 灰原	9	丸瓦	22.4+ 玉7.8	- 玉13.1	15.1 玉10.3	1.8 玉1.6	-	-	凹面：10YR 5/1 凸面：7.5YR 5/2	凹面：粘土組織→布目痕→ナデ 凸面：縄叩き→ロクロナデ 周縁：側面・狭端面ヘラケズリ	F-004	1-4
2	1号窯跡	4	丸瓦	23.5+ 玉5.9+	- 玉7.8	8.5+ 玉-	2.1 玉1.4	-	-	凹面：7.5YR 7/3 凸面：7.5YR 7/3	凹面：粘土組織→布目痕 凸面：縄叩き→ロクロナデ 周縁：側面ヘラケズ 凹面：押印田	F-005	1-5 98
3	1号窯跡	4	丸瓦	29.7+ 玉1.9+	20.9 玉2.9+	4.5+ -	2.1 玉-	-	-	凹面：10YR 5/1 凸面：7.5YR 5/1	凹面：粘土組織→布目痕→ユビナデ 凸面：縄叩き→ロクロナデ 周縁：側面・広端面ヘラケズリ 凹面：ヘラ書き「×」	F-006	1-6 104

第24図 1号窯跡出土遺物(2)



番号	遺構名 グリッド	層位	種別	最大長 (cm)	広端幅 (cm)	狭端幅 (cm)	厚さ (cm)	瓦当面 長(cm)	瓦当面 厚さ(cm)	色調	成形・調整 備考	登録 番号	写真 図版
1	1号窯跡	3	丸瓦	26.7+ 玉0.7+	10.5+ 玉-	-	1.8 玉-	-	-	凹面：7.5YR 5/1 凸面：5YR 5/1	凹面：粘土結痕→布目痕 凸面：縄叩き→ロクロナデ→ヘラケズリ 周縁：側面・広端面ヘラケズリ 凹面：押印⊕	F-007	1-8 99
2	1号窯跡	1	丸瓦	29.9+ 玉1.8+	12.5+ 玉7.7+	8.8+ 玉-	2.0 玉2.0	-	-	凹面：5YR 6/4 凸面：7.5YR 7/4	凹面：粘土結痕→布目痕 凸面：縄叩き→ロクロナデ 周縁：広端面ヘラケズリ 凹面：ヘラ書き「伴」	F-008	1-7 101

第25図 1号窯跡出土遺物(3)

【 燃 焼 部 】 規模は下端で計測して、奥行き 2.7m、幅 1.6m、焚口幅 1.0m、残存する検出面から床面までの壁高 1.5mである。平面形は下端で、焚口から隔壁に向かって広がる逆台形である。床面は焚口から隔壁に向かって極めて緩やかに、1°の角度で傾斜する。南北両側壁は焼成部・隔壁の側壁から連続しており、縦長に半截した平瓦の凸面を上置き、長辺を側壁の面に合わせ、スサ入り粘土と交互に積み重ねている。表面には、スサを入れない粘土を貼っている。隔壁付近の両側壁は、北側壁では床面から 1.1m まで、南側壁では床面から 1.2m まで内湾気味に立ち上がっている。その両側壁上部では、完形の平瓦の凸面を上にして、燃烧部の中央に向かって迫り出すように積んでいる部分が認められる。隔壁の前面に接した通焰孔の上部で、凸面を上にした状態で平瓦が 5 段程度重なった状況を確認した。出土状況等から判断して、燃烧部がある程度埋没した後に、天井部が落下したものと



番号	遺構名 グリッド	層位	種別	最大長 (cm)	広端幅 (cm)	狭端幅 (cm)	厚さ (cm)	瓦当面 長(cm)	瓦当面 厚さ(cm)	色調	成形・調整 備考	登録 番号	写真 図版
1	1号窯跡	15	平瓦	35.5	4.4 (24.4)	23.4	2.6	-	-	凹面：7.5YR 5/1 凸面：N 4/0	凹面：布目痕 凸面：縄叩き 自然釉 周縁：ヘラケズリ 凹面：ヘラ書き「1」	G-001	1-9 103
2	1号窯跡	15	平瓦	36.3	14.7+	12.6+	2.4	-	-	凹面：N 5/0 凸面：N 5/0	凹面：糸切り痕→布目痕 自然釉 凸面：縄叩き→一部ヘラナデ 周縁：ヘラケズリ 凹面：ヘラ書き「七」	G-002	2-1 104

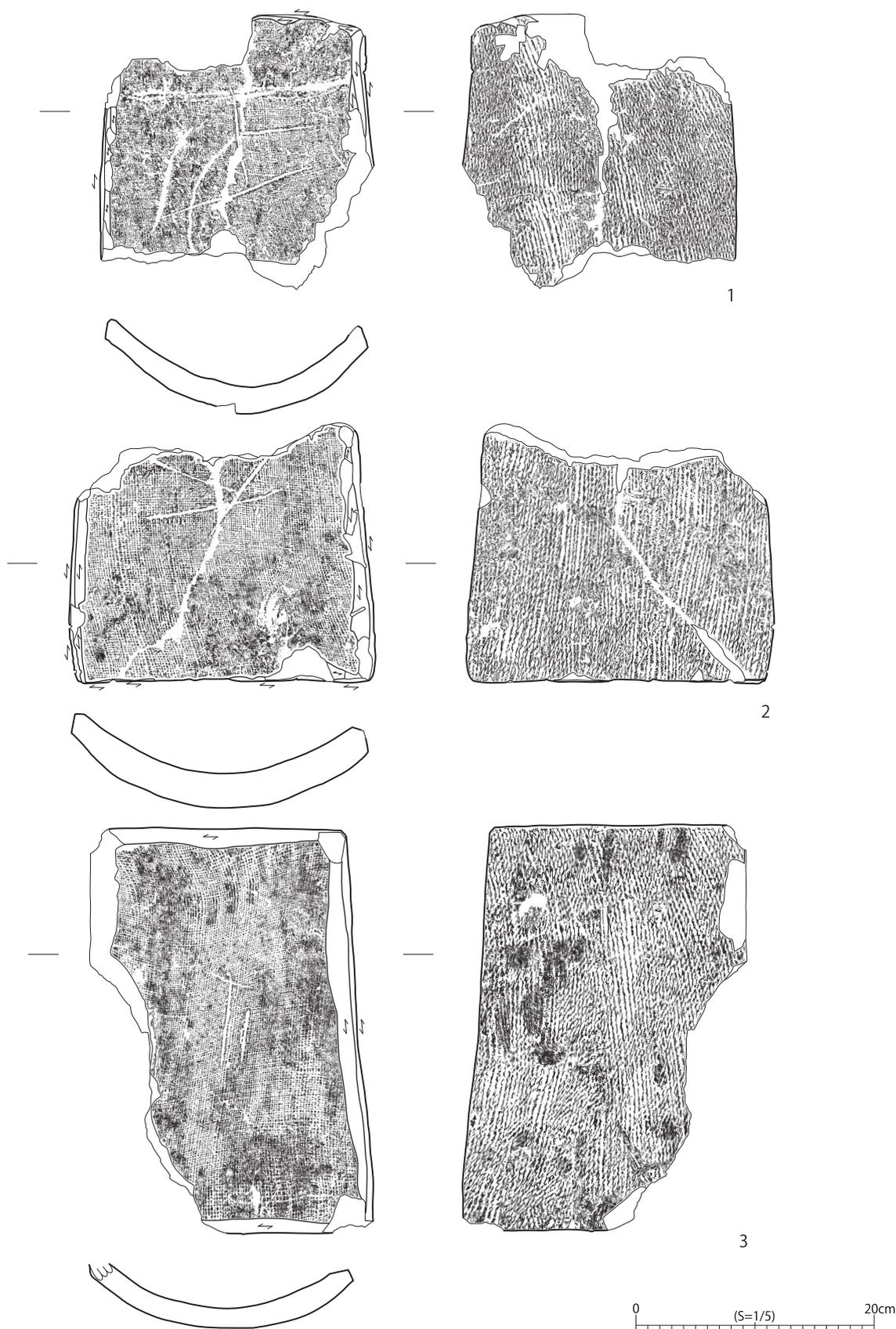
第26図 1号窯跡出土遺物(4)

であると思われる。

焚口北側壁付近には安山岩系の石、その南側に凝灰岩質砂岩系の石を確認した。また、焚口南側壁付近の攪乱から安山岩系の石（長さ 50cm×幅 35cm×厚さ 20cm）が出土しており、焚口に係るものが移動されたものと思われる。

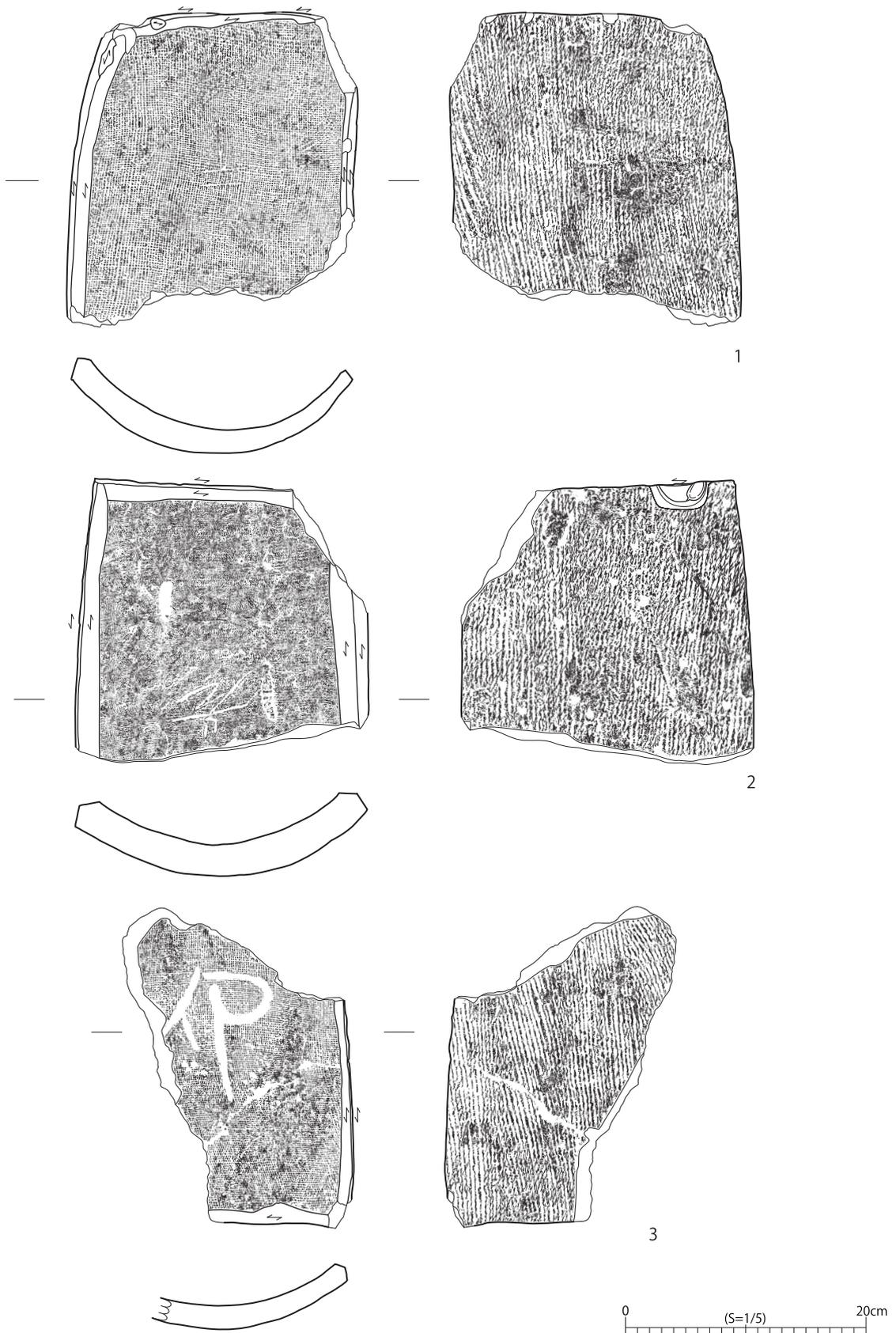
床面・壁面は、被熱によりやや強く赤色化し、硬化している部分が認められる。窯体周囲の被熱状況は、窯体に近い部分ではにぶい赤褐色で、離れた部分では明赤褐色である。

構架材は、北側壁外（にぶい黄橙色粘土部分）で1ヶ所検出した（写真 6-4）。構架材は炭化し、直径は径 1cm前後で、横断面は円形である。



番号	遺構名 グリッド	層位	種別	最大長 (cm)	広端幅 (cm)	狭端幅 (cm)	厚さ (cm)	瓦当面 長(cm)	瓦当面 厚さ(cm)	色調	成形・調整 備考	登録 番号	写真 図版
1	1号窯跡	15	平瓦	23.2+	-	9.0 (20.9)	2.3	-	-	凹面：N 5/0 凸面：N 5/0	凹面：布目痕 凸面：細叩き 周縁：側面・狭端面ヘラケズリ 凹面：ヘラ書き「上」	G-003	2-2 104
2	1号窯跡	15	平瓦	22.0+	23.6	-	3.0	-	-	凹面：10R 5/1 凸面：5YR 5/2	凹面：布目痕 凸面：細叩き 周縁：側面・広端面ヘラケズリ 凹面：ヘラ書き「大」	G-004	2-3 103
3	1号窯跡	14	平瓦	34.3	9.9 (23.9)	19.5 (21.5)	2.2	-	-	凹面：7.5YR 6/3 凸面：10YR 6/3	凹面：布目痕 凸面：細叩き→一部ナデ 周縁：ヘラケズリ 凹面：ヘラ書き「1」	G-005	2-4 102

第27図 1号窯跡出土遺物(5)



番号	遺構名 グリッド	層位	種別	最大長 (cm)	広端幅 (cm)	狭端幅 (cm)	厚さ (cm)	瓦当面 長(cm)	瓦当面 厚さ(cm)	色調	成形・調整 備考	登録 番号	写真 図版
1	1号窯跡	12a	平瓦	26.3+	-	17.8 (21.3)	2.4	-	-	凹面：10R 5/1 凸面：5R 5/1	凹面：糸切り痕→布目痕 自然釉 凸面：縄叩き→一部ナデ 融着 周縁：側面・狭端面ヘラケズリ 凹面：ヘラ書き「〒」	G-006	2-6 104
2	1号窯跡	12a	平瓦	23.8+	-	16.4 (22.5)	3.0	-	-	凹面：7.5YR 5/1 凸面：7.5YR 5/1	凹面：糸切り痕→布目痕 融着 凸面：縄叩き→一部ナデ 融着 周縁：側面・狭端面ヘラケズリ 凹面：ヘラ書き「岩カ」	G-007	3-3 103
3	1号窯跡	12a	平瓦	27.0+	10.0+	-	2.0	-	-	凹面：5YR 5/2 凸面：5YR 6/2	凹面：布目痕 凸面：縄叩き→一部ケズリ 周縁：側面・広端面ヘラケズリ 凹面：ヘラ書き「伊」	G-008	2-7 103

第28図 1号窯跡出土遺物(6)

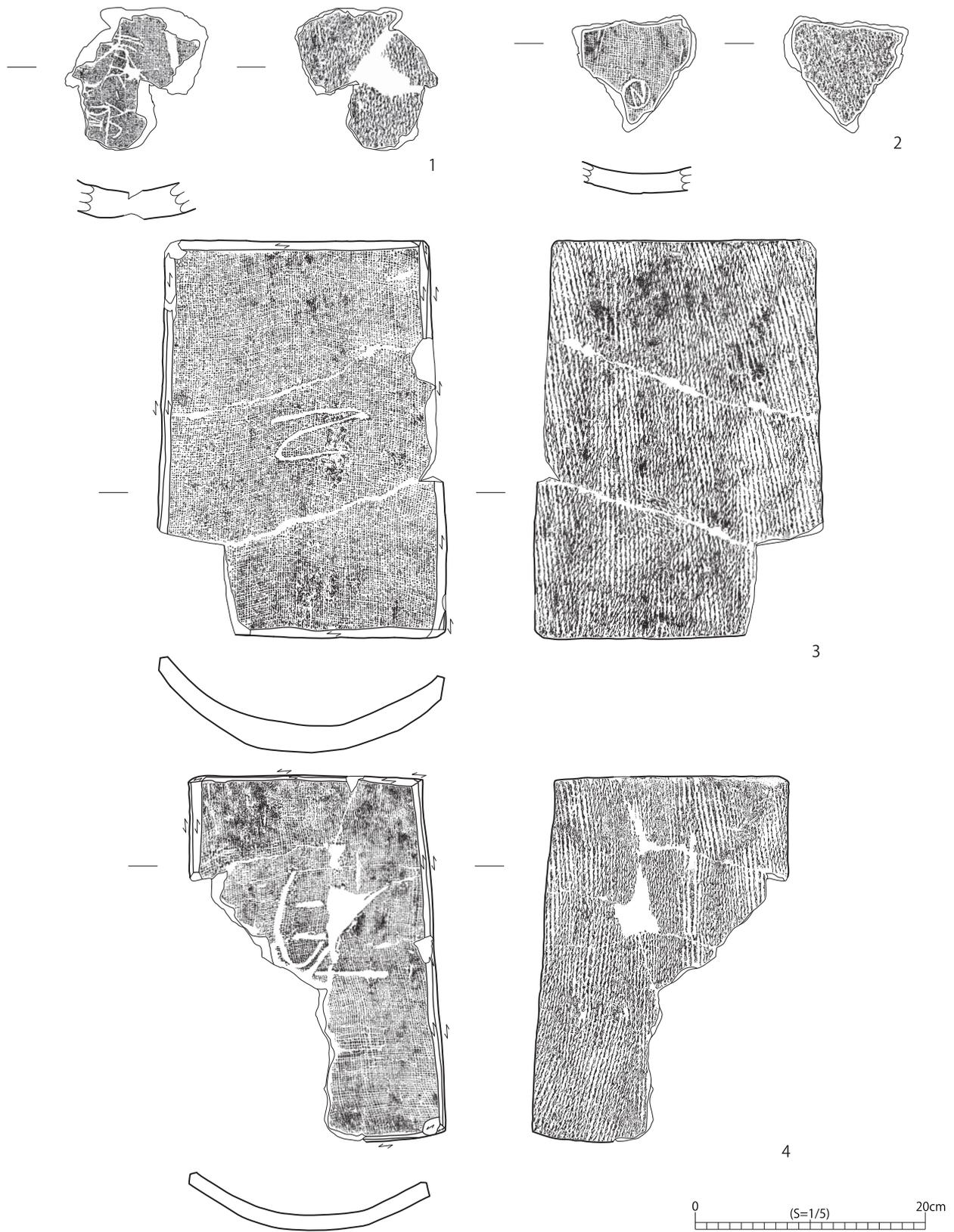


番号	遺構名 グリッド	層位	種別	最大長 (cm)	広端幅 (cm)	狭端幅 (cm)	厚さ (cm)	瓦当面 長(cm)	瓦当面 厚さ(cm)	色調	成形・調整 備考	登録 番号	写真 図版
1	1号窯跡	12a	平瓦	33.0	14.3+	13.9+	2.5	-	-	凹面：10YR 5/1 凸面：10YR 5/1	凹面：糸切り痕→布目痕 凸面：縄叩き 周縁：ヘラケズリ 凹面：不明押印 ヘラ書き「11」	G-009	2-5 100
2	1号窯跡	11	平瓦	37.7	19.2 (24.6)	24.5	2.9	-	-	凹面：5YR 6/4 凸面：7.5YR 6/4	凹面：糸切り痕→布目痕→一部ナデ 凸面：縄叩き 周縁：ヘラケズリ 凹面：ヘラ書き「1」	G-010	3-5 103

第29図 1号窯跡出土遺物(7)

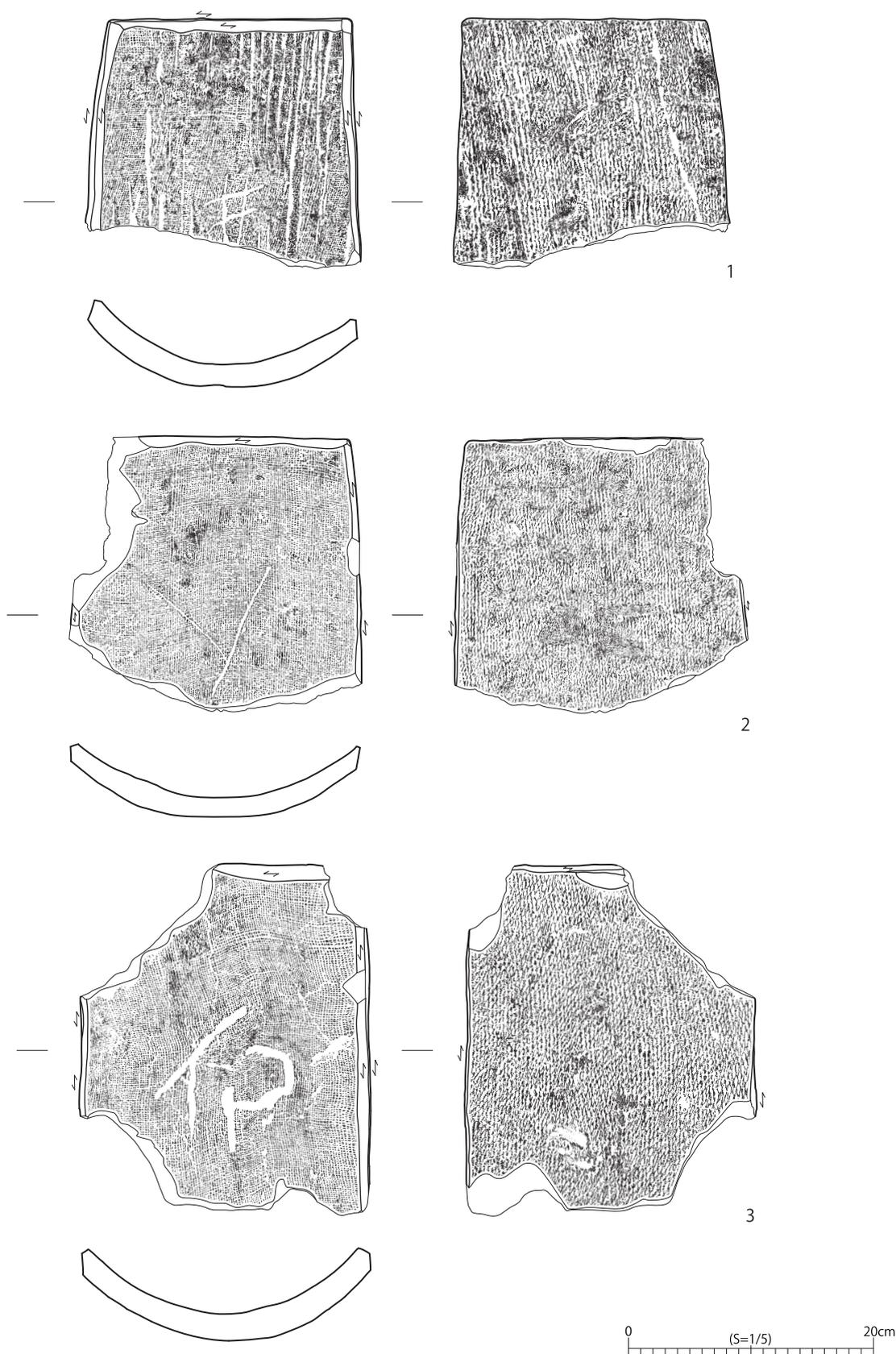
【 前庭部 】 燃烧部北側壁から焚口に続く壁は北側に開き、燃烧部南側壁から焚口で開く壁はやや南側に外傾して前庭部へ続いている。前庭部は、焚口付近では南北 2.2m・東西 2.0m のほぼ方形、その西側斜面では径 2.0m の不整形円形である。接続部分に連続性は認められないが、土層の堆積状況から一連の施設と考えられる。床面に凹凸は認められず、西側に向かって緩やかに傾斜している。

【 堆積層 】 大別7層、細別18層を確認した。大別1層：流入堆積層。大別2層：灰白色火山灰層。流入堆積層。大別3層：瓦類を極めて多量に混入する。焼成部の天井材・壁材を多量に含む層（以下、本章ではこの種の層位を窯体崩落層と称する）。大別4層：流入堆積層。大別5層：燃烧部の天井材を多量に含む窯体崩落層。大



番号	遺構名 グリッド	層位	種別	最大長 (cm)	広端幅 (cm)	狭端幅 (cm)	厚さ (cm)	瓦当面 長(cm)	瓦当面 厚さ(cm)	色調	成形・調整 備考	登録 番号	写真 図版
1	1号窯跡	11	平瓦	12.5+	12.4+	-	2.7	-	-	凹面：N 4/0 凸面：7.5YR5/1	凹面：布目痕 凸面：縄叩き 凹面：ヘラ書き「春部カ」	G-011	3-1 106
2	1号窯跡	10	平瓦	10.2+	10.3+	-	1.8	-	-	凹面：10YR 5/2 凸面：2.5Y 5/1	凹面：布目痕 凸面：縄叩き 凹面：押印㊶	G-012	3-4 100
3	1号窯跡 灰原	9	平瓦	34.9	16.9 (25.4)	21.5	2.5	-	-	凹面：5YR 5/2 凸面：7.5YR 5/1	凹面：布目痕→一部ナデ 凸面：縄叩き 周縁：ヘラケズリ 凹面：ヘラ書き「Z」	G-013	3-6 102
4	1号窯跡 1号窯跡灰原	9	平瓦	32.2	6.9 (23.4)	20.4	1.3	-	-	凹面：7.5YR 5/1 凸面：10YR 5/1	凹面：布目痕→一部ナデ 凸面：縄叩き 周縁：ヘラケズリ 凹面：ヘラ書き「有」	G-014	3-2 102

第30図 1号窯跡出土遺物(8)



番号	遺構名 グリッド	層位	種別	最大長 (cm)	広端幅 (cm)	狭端幅 (cm)	厚さ (cm)	瓦当面 長(cm)	瓦当面 厚さ(cm)	色調	成形・調整 備考	登録 番号	写真 図版
1	1号窯跡 灰原	9	平瓦	20.7+	-	19.0	2.1	-	-	凹面：N 5/0 凸面：7.5YR 5/1	凹面：布目痕→一部ナデ 凸面：縄叩き→一部ヘラナデ 周縁：側面・狭端面ヘラケズリ 凹面：ヘラ書き「井」	G-015	4-1 101
2	1号窯跡 灰原	9	平瓦	22.6+	-	17.0 (22.1)	2.2	-	-	凹面：2.5YR 5/2 凸面：10R 4/2	凹面：布目痕 凸面：縄叩き→一部ナデ 周縁：側面・狭端面ヘラケズリ 凹面：ヘラ書き「人」	G-016	4-3 105
3	1号窯跡 灰原	9	平瓦	29.0+	-	8.6 (23.1)	2.6	-	-	凹面：7.5YR 5/1 凸面：7.5YR 5/1	凹面：布目痕 凸面：縄叩き→圧痕 周縁：側面・狭端面ヘラケズリ 凹面：ヘラ書き「伊」	G-017	4-4 103

第31図 1号窯跡出土遺物(9)